

第6学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「書き表し方を工夫して、経験と考えを伝えよう」 教材名「大切にしたい言葉」

2 単元の目標

考えを表す語句の意味や語感を確かめ、自分の経験や考えを述べる文章で使える。経験した事実と感想、今の考えを区別し、大切にしたい理由が伝わるよう詳しくさを調整して書ける。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①考えを表す語句の意味や語感を確かめ、自分の経験や考えを述べる文章で使っている。（〔知識及び技能〕(1)オ）	①「書くこと」において、経験した事実と感想、今の考えを区別し、大切にしたい理由が伝わるよう詳しくさを調整して書いている。（B(1)ウ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

大切にしたい言葉と、それに関わる自分の経験を結び付けて文章にする。名言の説明に終始せず、その経験のどこで自分の考えが動いたかを詳しく書く。事実と、そのときの感想、今の考えを区別する。学習指導要領のB(1)ウを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)オを、言語活動の中で確かめる。

(2) 児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

(3) 指導について

経験のメモに「起きたこと」「そのとき思ったこと」「今考えること」の見出しを付ける。公開したくない経験は選ばせない。出来事が思い出せない児童は学校生活で印象に残った言葉から探す。おおむね満足できる状況は、経験した事実と感想、今の考えを区別し、大切にしたい理由が伝わるよう詳しくさを調整して書いているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全6時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○大切にしたい言葉と関係する経験を集め、書く相手と目的を決める。	学習状況を見て支援する。
第2次	2	○起きたこと、そのときの感想、今の考えを分け、文章の順を考える。	知①（語句や内容の整理）
	3	○下書きを書き、経験のどこを詳しく述べると大切にしたい理由が伝わるか考える。	学習状況を見て支援する。
	4 （本時）	○読み手に理由が伝わった部分を尋ね、詳しくする所と短くする所を選んで書き直す。	思①（発言・学習記録）
	5	○語句や文の続き方を確かめ、事実と考えを区別して文章を仕上げる。	学習状況を見て支援する。
第3次	6	○文章を交流し、経験と考えを結び付けた書き方を振り返る。	態①（学習前後の記録・振り返り）



6 本時の指導 (4/6)

(1) 本時の目標

経験した事実と感想、今の考えを区別し、大切にしたい理由が伝わるよう詳しくさを調整して書ける。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「その言葉を大切にしたい理由が、出来事のどの部分から伝わりますか。詳しく書く所と短く書く所をどう決めますか」 【めあて】大切にしたい言葉と、それに関わる自分の経験を結び付けて文章にする。 〈予想される児童の反応〉 ・出来事を全部同じ長さで書くと、大事な場面が埋もれる。	本時に考える対象を確認し、既に確かめたことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「その言葉を大切にしたい理由が、出来事のどの部分から伝わりますか。詳しく書く所と短く書く所をどう決めますか」 大切にしたい言葉に関わる経験の事実、当時の感想、今の考えを分けてメモにする。言葉を大切にしたい理由が伝わる順に並べて文章を書く。読み合いで理由が伝わったか確かめ、詳しくする箇所や省く箇所を選んで直す。 〈予想される児童の反応〉 ・出来事を全部同じ長さで書くと、大事な場面が埋もれる。 ・そのときの思いと今の考えは違うので書き分けたい。 ・言葉の意味だけでは、自分の経験との関係が伝わらない。	経験のメモに「起きたこと」「そのとき思ったこと」「今考えること」の見出しを付ける。公開したくない経験は選ばせない。出来事が思い出せない児童は学校生活で印象に残った言葉から探す。 想定する難しさ：有名な言葉の由来を説明するだけになる。実際の出来事に後から考えた気持ちを混ぜる。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 経験した事実と感想、今の考えを区別し、大切にしたい理由が伝わるよう詳しくさを調整して書いている。(事実と感想を分けたメモ・理由を述べる文章)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって確かめたことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・言葉の意味だけでは、自分の経験との関係が伝わらない。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った実際の言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「その言葉を大切にしたい理由が、出来事のどの部分から伝わりますか。詳しく書く所と短く書く所をどう決めますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた実際の言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

